

— 第百貳拾号 —

(2012年秋号)

秋のミニ市と秋の陶磁器まつり

今年の夏の酷暑に耐えきれずに、果たして秋はやって来るのだろうかと心配していましたが、季節は巡り、日一日と秋は深まってまいりました。

しん窯では、食欲の秋をにらんで独自のグルメイベントを企画していましたが、諸般の事情で中止になりました。その分、有田焼創業400年やしん窯青花ブランド誕生40周年を4年後に控えて、新作に挑んでいきたいと思っています。

ミニ市は、佐賀のバルーンフェスタや唐津のおくんちとセットでお楽しみ下さい。



(秋の新作)

貴婦人親子長角焼皿	陶器市価格	2,100円
(縦 11.6cm × 横 23.7cm × 高 2.5cm)		
萩絵 4.6寸浅飯碗	陶器市価格	2,500円
(径 14.1cm × 高 5.5cm)		
さくらんぼ小皿 (1枚)	陶器市価格	1,600円
(径 9.5cm × 高 3.5cm)		
小花つなぎ蓋付マグカップ	陶器市価格	2,800円
(本体 : 径 8.0cm × 高 7.6cm ・ 容量 250cc)		
(蓋 : 径 8.8cm × 高 2.0cm)		

唐津検定

第2回唐津検定を受けに行きました。

昨年、西日本新聞に唐津検定模擬試験が連載されていました。興味があったので申し込んだら、締め切り後で残念でした。そこで、今年こそと捲土重来8月に申し込みました。

なぜ唐津検定受験かといいますと、

- ① 有田の観光化推進のため。
- ② 有田と唐津は、やきものでつながりが深い。
- ③ ボケ防止。

という単純な動機でした。

9月30日（日）の会場は、200名を超す受験者であふれていました。9歳から87歳までの老若男女が集まっていましたが、50年前の大学受験当時の緊張感もなく、和やかなユルイ空気が流れていました。唐津探訪（1冊1,000円）の本を持ち込んで良いという、これまでの受験・検定風景とはまるで違っていましたので、楽しむ、学ぶという観光本来の目的を唐津検定によって支援しようという試みでした。また、合格証は唐津くんち曳山の山車ですが、今年は二番曳山のデザインで青獅子。これから14回まで受験、合格すれば、すべての曳山のデザインストラップが集まります。それも楽しみです。何度でも唐津方面へ出かける仕掛けづくりを考案された、唐津市・商工会議所・観光協会に拍手喝采です。

私もまぐれで合格しました。



有田焼の定義

400年事業を4年後に控えて、有田焼の定義についてあらためて問われています。それは、市場が世界に広がり、多種多様なお客様の声を拾ってやきものへ展開してまいりましたが、今一度原点に戻って、有田焼らしさとは何だろうと自問自答してみました。

有田焼とは、陶石を主原料とした強くて美しい白磁である、そして加飾によって描かれた文様美である、と思っています。

400年の間に、伝統文様の様式美が確立しました。赤絵で有名な柿右衛門様式、献上品の鍋島様式、そして金彩を施した絢爛豪華な古伊万里様式といわれています。

我が工房では、藍と白の配色のコントラストであり、ユニークな絵柄を楽しむ筆数であると思っています。青花ブランドのイメージであり、こだわりです。

また、釉薬による色釉の世界もあります。白磁・青磁・黄磁・辰砂・天目など、自然界の色に魅せられてやきものに表現しています。

他にも、工業用製品として大活躍しているニューセラミックスの世界もあります。一般的に1300℃焼成といわれていますが、ニューセラの分野では1500℃を超える焼成に耐えられる素材も開発され、様々な部品として活躍の場は無限にあります。

お客様からの声

嬉しいおたよりをいただきました。ありがとうございます。

(K・S様) ※一部抜粋させていただきました

私は東京の生まれ育ちですが、結婚して18年ほど茨城に住んでいます。両親は福岡県飯塚市の出身で、子供のころから有田焼の器を使っておりました。佐賀県に母の妹がおり、その勧めで青花の食器を手にしたのは30年も前のことです。実家ではその茶碗や小鉢、大皿などを今も大切に使っています。私は結婚した折に、茶碗、パスタ皿、コーヒーカップ、取鉢などをそろえて、もちろん今も愛用しています。私が住む茨城のあたりでは、水戸市の「川上陶器」と言う小さな店と京成百貨店の食器コーナーに青花の器がおいてあります。年に1度くらい見に行くのですが、種類もごくわずかで、変化もなく、いつもあきらめていました。

外国の磁器では、ロイヤルコペンハーゲンの青い色が大好きで、たまに通信販売で購入していましたので、先日ふと「青花」の器も通信販売で購入できるかなと思い、ネットで調べて「しん窯」さんに行き着きました。

あふれるほどの種類を見ることができて感激です。まるで、窯を直接見に行ったような気分です。

我が家の息子・17歳と13歳は「青花」のなめらかで暖かい手触りが大好きです。日々、良い器を使って育てましたので、田舎育ちですが、良いものが感じられる子供になりました。とりとめのないことばかりですが、お礼を申し上げたい一心で書きました。

佐賀県立有田窯業大学校 学生インターンシップレポート

(M・Hさん) ※一部抜粋させていただきました

9月3日(月)～7日(金)の5日間、大変お世話になりました。本当にありがとうございました。5日間という限られた短い期間でしたが、私にとって、とても中身の濃い5日間となりました。

インターンシップにしん窯を選んだ理由は、「ひとつの工程だけでなく、色々体験させて頂ける」ということです。実際に、細工場、窯場、絵付座、と焼き物が出来上がる一連の流れの工程を体験させて頂きました。自分が体験させて頂いた仕事は、職人さんが捌く仕事量の一部に過ぎないのですが、集中力や体力がまだまだ不足していることを肌で感じました。これらをもっと鍛えるのが今後の課題のひとつになりました。

以前1年生の時に一度見学させて頂いた事があり、展示室や事務所、工房の入り口に植えてある明るい色の花が印象に残っています。

実際にしん窯でお世話になると、この窯がとても賑やかな場所である事に気付きました。工作中的職人さんたちは静かですが、工房のあちこちで聞こえてくる作業中の音、重機の動く音、それから、しん窯を訪れて工房を見学するお客さんを案内する声が聞こえてきました。日々この工房で、しん窯を支えている職人さんたちの様子を身近に見る事が出来ました。

体験させて頂いた仕事は、どれも緊張の連続で、窯大の中にいたままでは決して味わえないものでした。自分が鑄込んでいる生地、はわいている素焼、窯出しをしている磁器、どこの工程をとっても、お客さんの手に渡る途中の「1工程」に過ぎず、そのどれかひとつの中で自分がしくじれば、それ迄に職人さんたちが手掛けた労力が全て無駄になります。そういうものが、この5日間常について回ったものであり、やきものをつくる現場で突き付けられる「あたりまえ」だと感じました。

新人として(今回は実習生として)どのような態度で現場に臨めばよいかを考えると、教えて下さる先輩への「感謝」と、与えられる仕事に対する「意欲的・前向きな気持ち」なのではないかと、この5日間を通じて思いました。「感謝」は、周囲とのチームワークのために、「意欲的・前向きな気持ち」は同じ様な失敗を繰り返さないよう自分のために必要であると考えます。

どの職人さんでも、私たち学生が呼べば、一旦自分の仕事の手を止めて、駆けつけてくださいます。きちんと自分の目で確認し、次の指示を与えます。分からない事、聞き取りきれなかった事を尋ねれば、もう一度説明してくださいます。5日間でもこれらが積み重なれば、いくらかのまとまった時間となり、職人さんがひと仕事終わられる程になっているかもしれません。「生産性が落ちる」というのを身を以て感じさせられる瞬間です。

新人教育が現場にとっての負担になる、というのも頷けます。だからといって、これらの確認を省き、仕事の失敗を招いては本末転倒なので、どうしてもこの時間は必要です。「受け入れ先の負担」というものを最も強く感じた時でした。

現在の景気不況は厳しく、消費の冷え込み、受注・売上減少等が続いています。そんな時に持っておきたい心構えは、目の前の問題に現実的な対処を行いながらも、前向きな気持ち、原動力を失わない事だと思います。今回しん窯で感じた事、体験させて頂いた仕事、味わった気持ちを自分の中の原動力として、今後も窯大で学び、卒業後も焼き物に携われるよう、自分を鍛えていきたいです。